

調査年報 1998

連 立 家 族

[日本の家族 10年変化]

博報堂生活総合研究所

「日本の家族」を徹底研究。調査年報 1998 発刊。

7月1日、98年版の調査年報が発刊になりました。今年のテーマは「家族」。夫婦のかたち、親子の関係、家族の絆…揺れ動く時代の中で、いま「家族とは何か」の議論が活発に行われ、様々な見解が示されています。生活総研では、ここで、日本の家族の現状とその行く末を見極める意味で、1200世帯への家族調査を実施し、「調査年報1998」としてまとめました。この生活新聞は、その要点を紹介するものです。

社会の最小単位としての家族は、当然そのまわりを取り巻く環境変化の影響を受けています。日本の婚姻状況の変化をみると、初婚年齢の上昇とともに未婚率が急激に上昇しており、20代後半で男性約7割、女性約5割が独身という状況です。また、離婚率の急激な上昇傾向も加味して考えれば、結婚という形態を望まない人たちが増加していることがわかります。こうした環境の中で、家族をもつという意味も当然変わってくるはずですが。

また、女性の就業率の増加は、収入、家事、育児などの家族内の役割分担意識や力関係などに変化を及ぼし、高齢化、少子化も、親との長期的な関係性や子供の希少性を高めるといった家族関係の在り方を変えているはずですが。

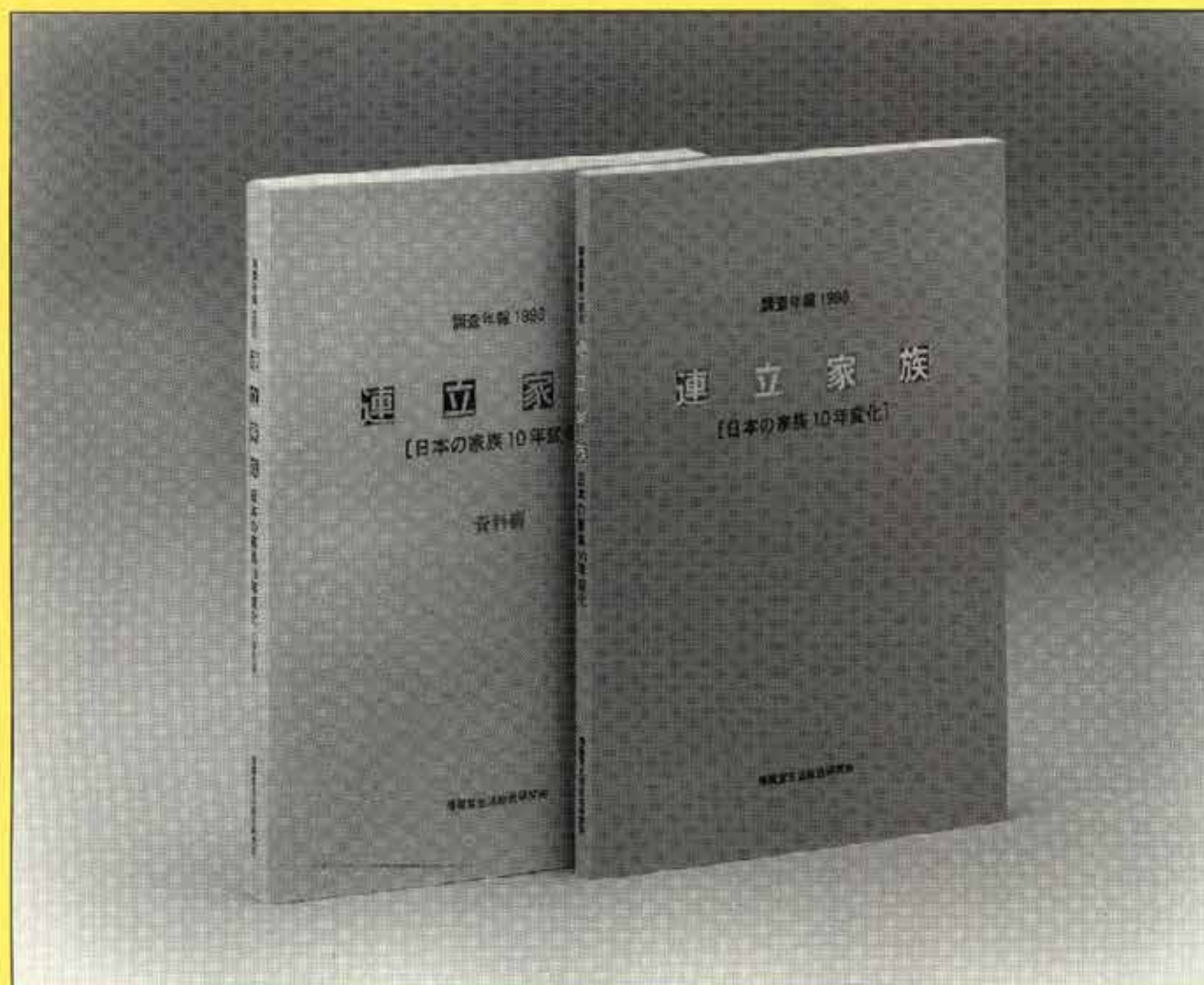
しかし、家族という形態そのものが消滅しているわけではありません。時代の風を受けながら、変質してゆく日本の家族。その新たなつながりを知り、21世紀のファミリー市場を考える上で、このレポートがお役に立てば幸いです。

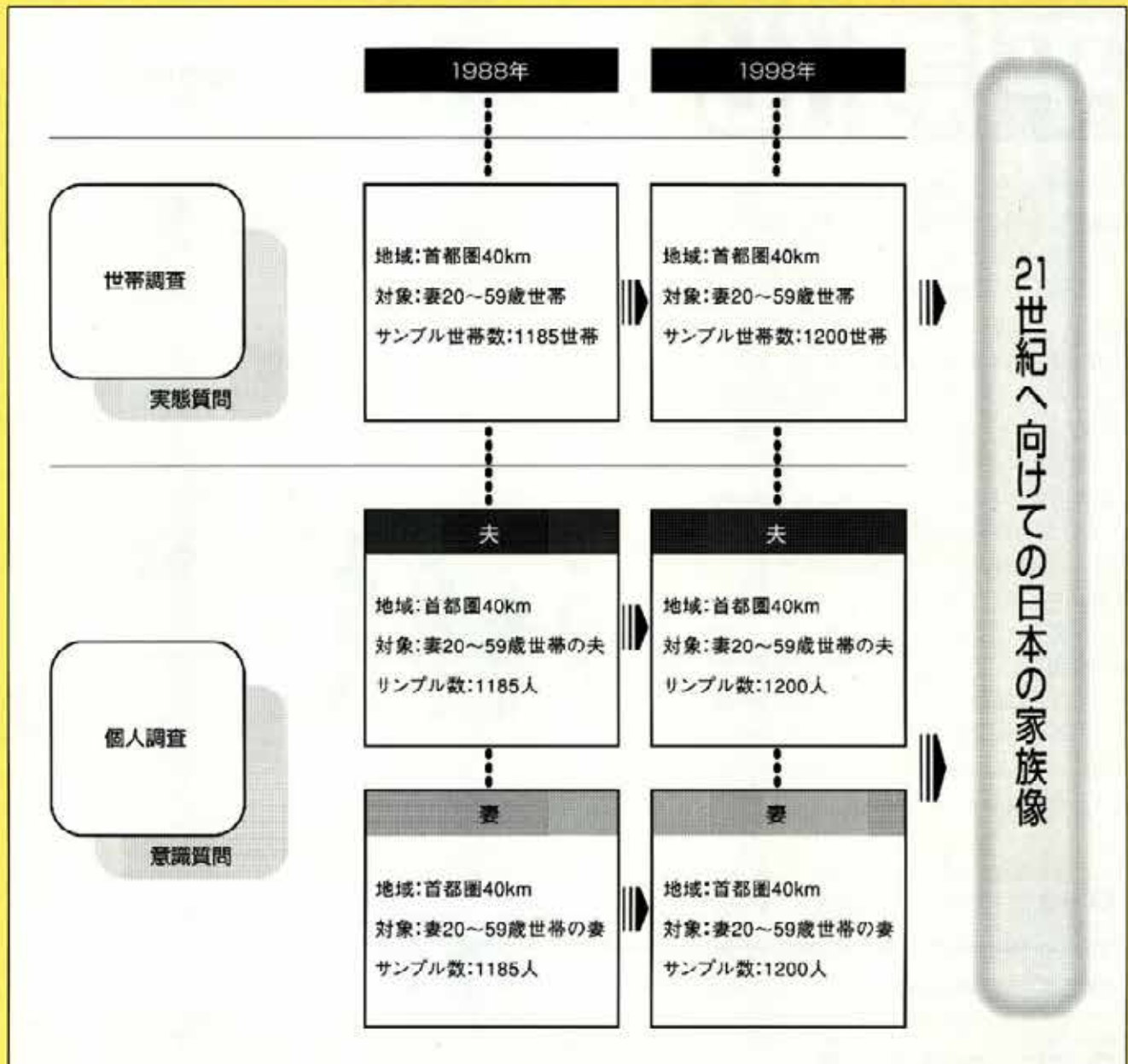
〈調査概要〉

- 調査地域：首都圏 40km
- 調査対象：妻の年齢が20歳から59歳のサラリーマン世帯
- サンプル数：1200世帯 夫1200人 妻1200人

年齢	専業主婦世帯	有職主婦世帯	年代計
妻20～29歳	97	49	146
妻30～39歳	206	117	323
妻40～49歳	188	234	422
妻50～59歳	169	140	309
合計	660	540	1200

- サンプリング法：該当エリアの町丁目別世帯累積表より120地点を等間隔に抽出し、該地点におけるエリアサンプリング
- 調査方法：訪問留置自記入法（同一世帯に「1-世帯票」「2-夫票」「3-妻票」の計3票を留め置き回答してもらった）
- 調査時期：1998年1月8日～2月2日





〈世帯の実態〉〈夫と妻の意識〉の10年変化を追跡。

家族といった時、配偶者、子供、自分の親、配偶者の親、兄弟・姉妹、孫、広くは親戚まで、そのイメージされる範囲は広いと思います。しかし、これらすべての人々を対象に調査を実施することは現実には難しいことです。そこで、今回はその中心的存在である夫と妻を対象として、自らの家族のこと、及び家族観を尋ねる調査を実施しました。

〈1世帯に3つの調査票〉

調査内容は、家族の衣食住やレジャー・消費行動など、実態面を尋ねた「世帯調査」と、夫、妻それぞれに家族意識を尋ねた「個人調査」に分かれています。つまり対象者である同一世帯に対して、「世帯票」「夫票」「妻票」の3冊の回答をお願いしたわけです。結果、1200世帯の実態データと、夫1200人、妻1200人（計2400人）の意識データが得られました。

た。これを分析の対象として、実態、意識の両面から日本の家族を探ったのが今回の調査です。

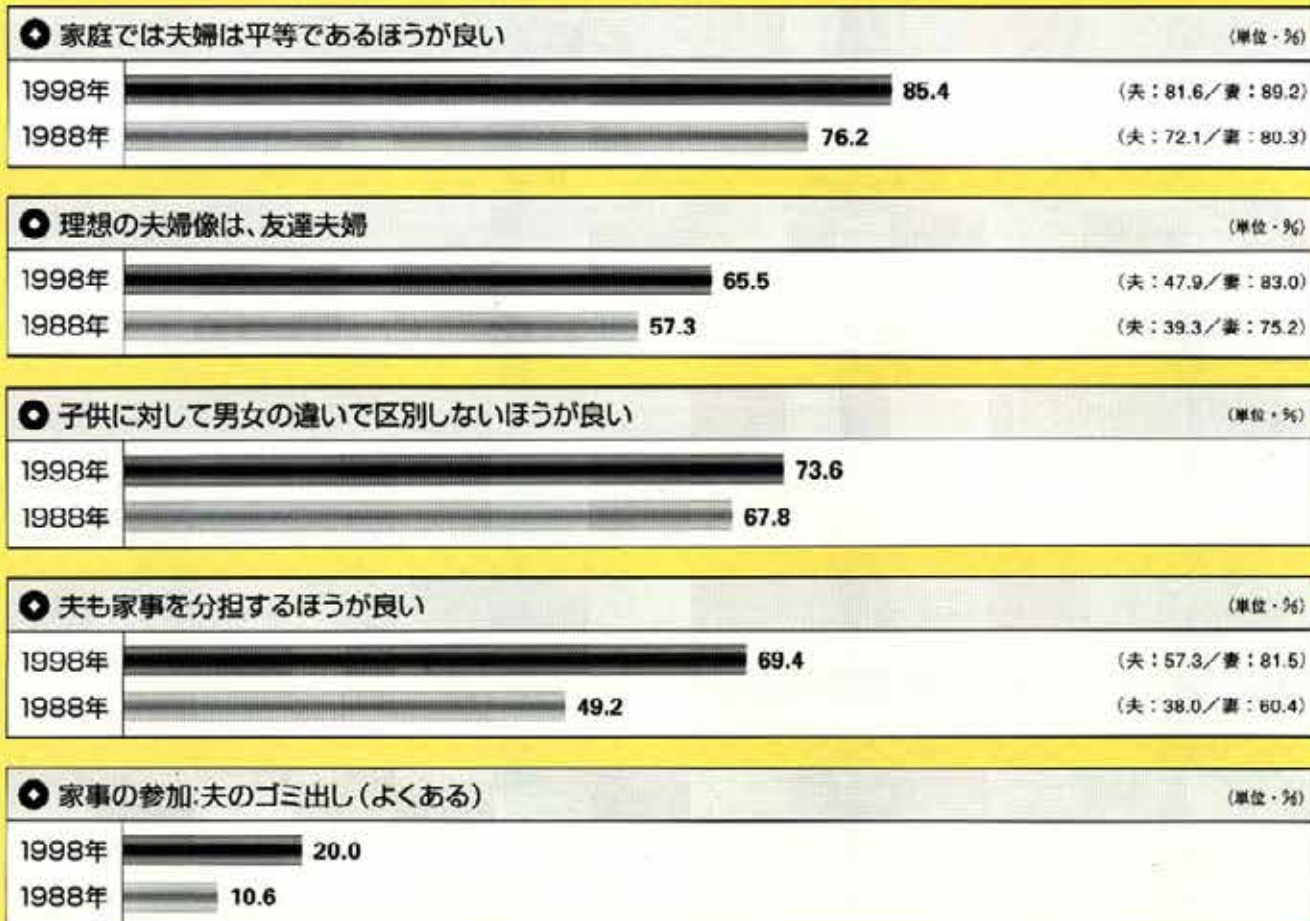
〈10年前の家族調査との比較〉

いまの家族像をみると同時に、今回の調査分析には、もう一つの目的があります。それは、家族の時系列変化を追跡することです。生活総研では、10年前、1988年に「家族調査」を実施しています。この結果と、今回の回答にどのくらいの開きがあるのかを探りました（今回の調査は、10年前の家族調査との比較が可能のように、地域、サンプル構成など、同様の設計）。調査年報1998は、こうした2時点間の調査結果の比較分析から、21世紀へ向けての日本の家族像を明らかにしようとしたものです。本紙では、10年変化にみられた家族の6大潮流について詳しくご紹介していきます。

平等化

家族の6大潮流<1>

家族の10年変化、1番目の潮流は平等化である。家庭では夫婦平等が良いという考え方については、8割強が賛成していて、10年間で9ポイント以上増加した。理想の夫婦像についても、友達夫婦というのが6割を大きく超えている。この変化は妻だけではなく、夫も望んでいるということが重要である。子供に対しても平等感は強い。男の子、女の子ということで区別しないほうが良いという考え方には7割強が賛成し、子供の発言権についても強いほうが良いという意見も増加傾向にある。夫婦の役割分担においても、夫も家事を分担するほうが良いという意識が、20ポイント以上伸びて7割近くに達し、主流の考え方になった。実際にゴミ出しをしている夫も、この10年間で倍増している。育児についても同様で、夫への分担意識は8割に迫っている。さらに、子供のしつけや親の面倒は、夫と妻が同じ程度の役割という考え方も増加しており、家庭生活全般において平等分担意識が高まっていることがわかる。



0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100

妻権化



2番目の潮流は妻権化である。まとまった貯金をするかどうかの決定権が妻にあるという世帯が急激に増加している。また、お金以外の決定権についても、親との同居という大きな問題から購読新聞の決定まで、幅広く妻の決定権は増大した。これにともない伝統的な意味での夫の優遇度は下降傾向にある。食卓では夫が上席という世帯は4割で、夫の出勤時、帰宅した時の送り迎えは半数近くの世帯が行わなくなっている。また、現実的な腕力である「なぐる」という行為についても、妻をなぐったことがある夫は、41.0%から31.7%と10ポイントほど減少したが、夫をなぐった妻は逆に増加して、その差は縮小した。総合的な決定権をみると、主に夫というのが大きく下降し、妻が掌握、夫と妻が同等が増加している。これに対してサイフのひもは、10年前もいまま妻が掌握しており、10年前は「決定権は夫、サイフのひもは妻」という図式だったが、いまは「金も力も妻」という方向へ変化していることがわかる。

● まとまった貯金の最終決定者：妻

(単位・%)



● 夫が出勤する時、妻が見送ったり、帰宅の時には、出迎えたりする

(単位・%)



● 夫をなぐったことがある妻

(単位・%)



● 総合的決定権：主に妻

(単位・%)



	98年	88年
主に夫	55.4	72.4
夫と妻が同等	20.9	15.6

● 「サイフのひも」：主に妻

(単位・%)



	98年	88年
主に夫	14.8	15.8
夫と妻が同等	11.2	9.5

女系化

家族の6大潮流〈3〉

3番目の潮流は女系化である。平等意識の高まりは、男系に偏りすぎていた家族の関係性を見直すことになった。それは女の子供や娘夫婦、妻の親という女系を中心にした関係の強化である。妻が大病をしたり、事故に合った時という不測の事態に、男の子供より女の子供を頼るという割合は、10年間でさらに高まった。将来についても、老後自分を扶養してほしい人として、長男は減少し、長女が増加している。同居についても、娘夫婦の伸びが著しく、10年前とは逆転して、息子夫婦との同居希望を上回った。親との関係をみると、子供の世話や買い物といった日常的な援助元については、夫の親に比べて妻の親が10年前から上回っていたが、その差はさらに拡大した。悩み事を相談する相手、同居先についても妻の親が増加している。また、妻は夫の家の墓に入るほうが良いという意見に対して賛成する妻は、10年前の6割から4割弱と減少している。これも夫系から離れたという妻の気持ちの表れと考えられる。



● 妻が大病、事故に遭った時に頼る人：女の子供

(単位・%)



	90年	88年
男の子供	9.4	9.9

● 同居している、同居したい、隣居したい：娘夫婦

(該当者ベース/単位・%)



	98年	88年
息子夫婦	22.8	22.4

● 家名や財産は男の子が継ぐほうが良い

(単位・%)



(夫：30.8/妻：13.8)

(夫：38.4/妻：26.0)

● 子供の世話で親の助けを借りる：妻の親

(該当者ベース/単位・%)



	98年	88年
夫の親	26.7	27.0

● 妻は夫の家の墓に入るほうが良い

(単位・%)



(夫：67.8/妻：36.6)

(夫：71.2/妻：58.0)

個人化



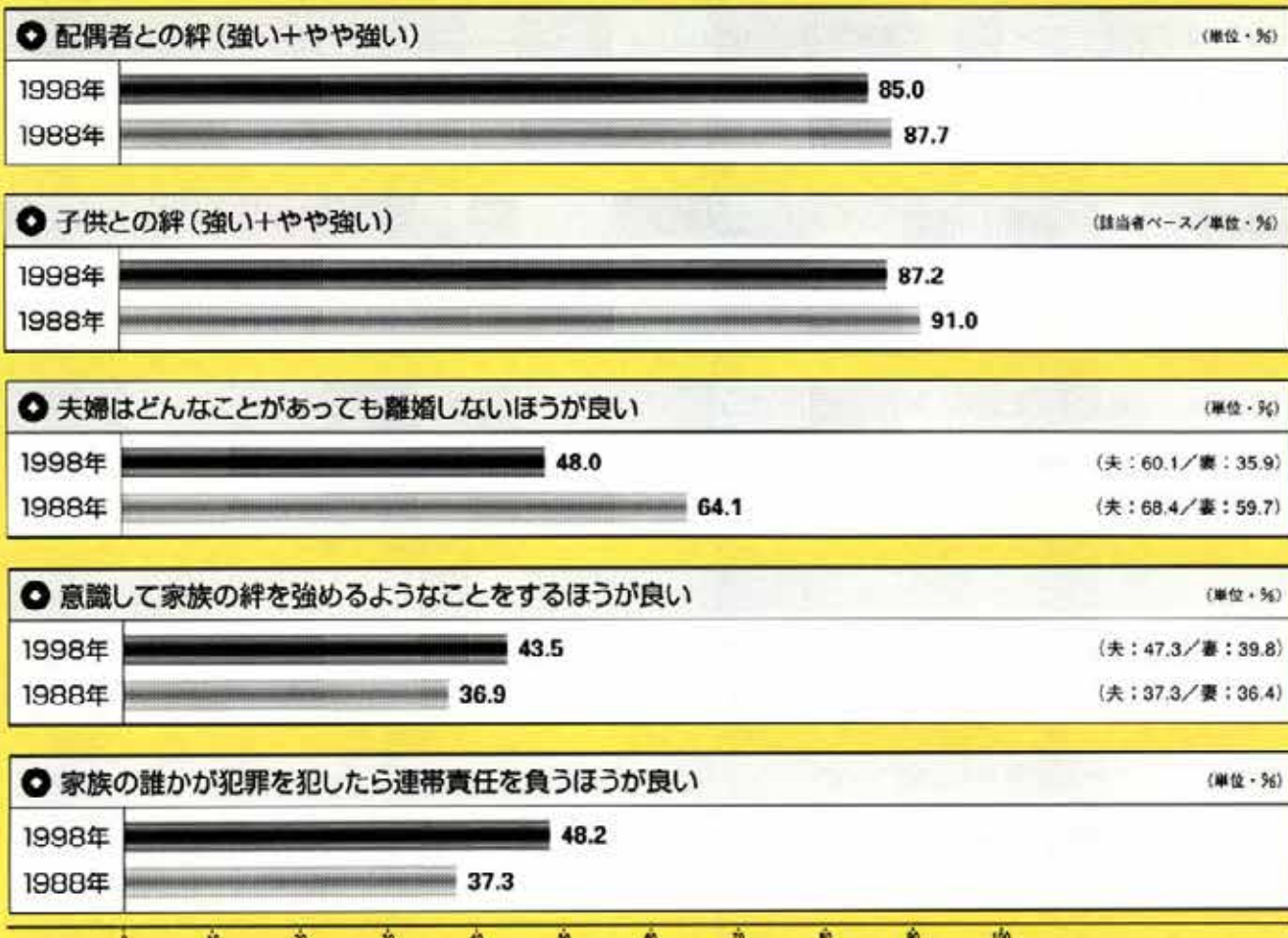
4番目の潮流は個人化である。世の中全体として「個」を重視するという流れは、家族という関係の中でも色濃く出ている。夫婦の間でもプライバシーを尊重するというのは9割を超えて、当たり前の方の考え方になっている。夫婦別姓が論議されているが、妻が仕事やつきあいで旧姓を通すほうが良いという考えは2割近くあり、夫、妻ともに増加している。自分の世界を重視すると考えれば、妻が旧姓を通すのも当然の結果といえる。子供に対しても同様である。子供の結婚相手に親も口を出すとか、子供は年老いた親とは同居するほうが良いといった子供との関わりを強める意見に対しては、そう思うという人が大きく減少している。家族内の決定権についても、妻が働きに出ることは妻が決め、夫が転職することは夫が決め、子供の進路は子供が決めるという世帯が、この10年間で、それぞれ10ポイント程度増加している。自分のことは自分で決めるという自立した関係が成立していることがわかる。



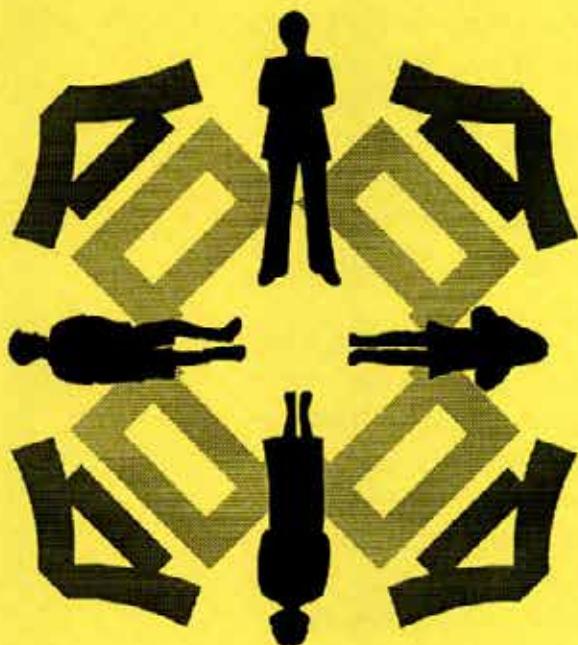
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100

緩系化

5番目の潮流は緩系化である。家族が、適度な距離感を保ちながら緩い関係で結ばれるようになった。家族内の絆をみると、配偶者に対しても、子供に対しても、絆は弱まる方向に変化している。自分の親、配偶者の親に対しても、絆の強さは減少している。また、夫婦はどんなことがあっても離婚しないほうが良いという意見は、10年前には6割を超えていたが、いまは5割に満たず、少数派の意見となった。特に、妻の変化が顕著である。実際にこれまでに離婚を考えたことがあるという妻は42.9%で、夫の23.4%に比べて倍近い率になっている。現実の状態面だけみれば、家族拡散の方向に見えるが、この変化の根底は「個」を尊ぶ個人化の流れである。つまり、拡散化を望んだのではなく、個人の世界を大事にするためには、緩く結ばれた関係のほうが良いのである。意識して家族の絆を強めたほうが良い、家族の犯罪は連帯責任という意見の増加は、家族が拡散を望んでいる訳ではないという証だろう。



合理化



6番目の潮流は合理化である。自分の世界を大事にし、家族のために犠牲になることを望まない意識は、情的な結びつきよりも、利害によって結びつく合理的な関係を作り出す。親との関係で見ると、衣類・食品など日常的な援助を親から受けている世帯は、10年間で半数に迫るまで増加した。住宅購入費用や結婚式の費用についても、親から援助してもらったという世帯が増えている。ところが、子供の住宅購入費用や結婚式の費用は、子供自身が全額負担するべきという考え方が増加しており、親には援助してもらいたいが、子供にはしたくないという都合の良い関係を望んでいる。夫、妻の関係についても、自分のこづかいは確保し、相手に対するプレゼント代は、家計費からという夫や妻が増加している。また、自分の時間を充実させるために、持ち帰り弁当などの外部サービスへの欲求が急速に高まっている。家族を経済的な合理性でとらえ直してみると、新たなビジネスのヒントが隠されているかもしれない。

● 衣類・食品などを親から援助(よく+時々)してもらう

(該当者ベース/単位・%)



● 住宅購入費用を親から援助(全額+一部)してもらった

(該当者ベース/単位・%)



● 子供の住宅購入費用：子供が全額負担するべき

(単位・%)



● 夫へのプレゼント代を家計費から支払う

(単位・%)



● 外部サービスを利用したい：持ち帰り弁当

(単位・%)



家族 10 年変化の全体像

ご紹介してきた通り、10年間の調査結果の比較から、日本の家族の新しい6つの潮流が明らかになりました。潮流には、その根底となる2つの大きな家族意識の変化があったと言えます。ひとつは、家族内は、平等で並列の関係が良いと考える**平等化**の流れです。この平等化を家族のみんなが望んだ結果、いままで弱かった妻の権力が増大し、**妻権化**の流れが進んだわけです。また、これまで強い立場にあった夫の親、男の子供（長男）との関係も見直され、妻の親、女の子供との関係性が強まるという**女系化**という流れも生まれました。ただ、こうした潮流は、単に女性が強くなったということではなく、みんなが平等を望んだ結果、いままで弱い立場だったものが同等になったとみるべきです。

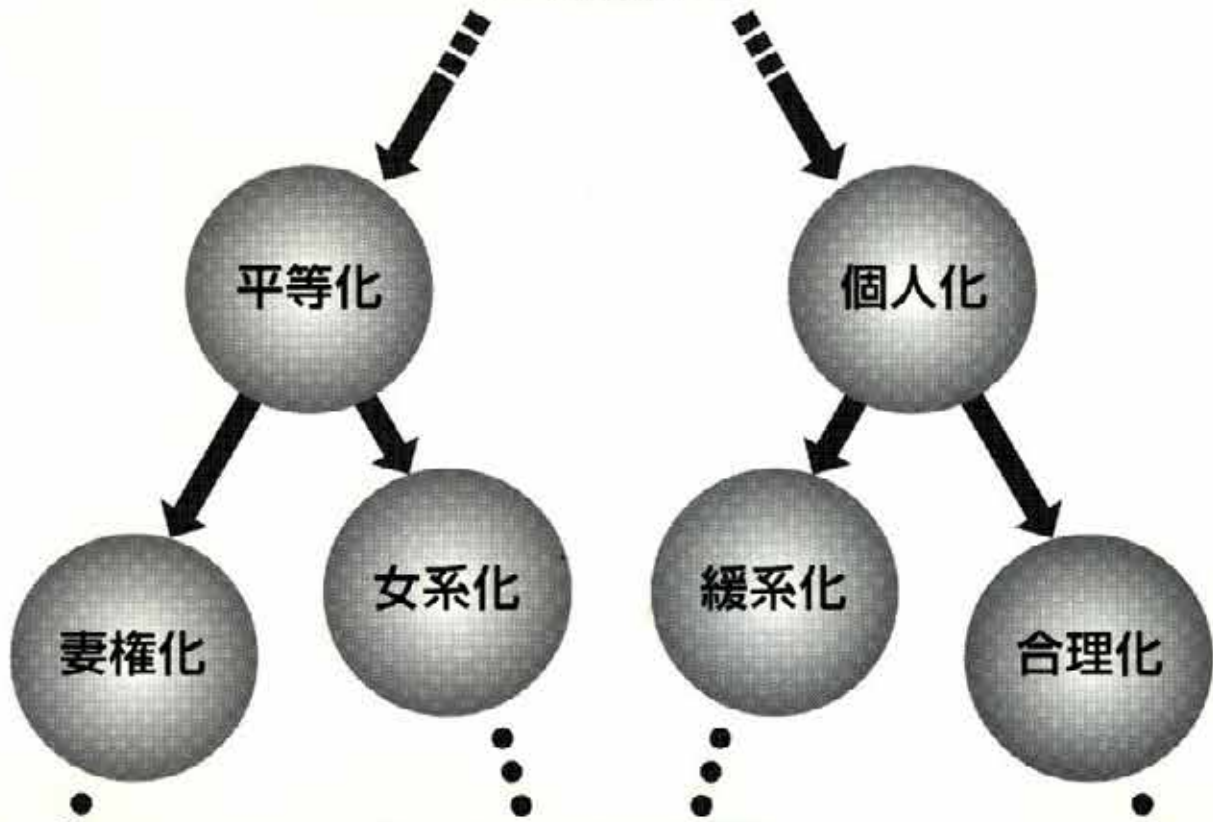
もうひとつの変化は、自分の世界を大事にして、自立した関係が良いと考える**個人化**の流れです。こうした気持ちを個々人がもつことは、家族の関係性を弱めることとなります。これが家族崩壊論につながるわけですが、これも自分の世界を大事にするためにとった家族の望んだ変化なのです。家族の拡散というよりも、適度な距離感をもって緩い関係で結ばれる**緩系化**という流れととらえるべきでしょう。さらに、こうした緩い関係と個人重視の考え方は、家族の各人が犠牲を強いられないような都合の良い関係を作り出しました。それが、自分にとって利のあるところとつながる**合理化**という流れです。

10年間の家族に対する満足度は、88年の89.9%から98年は90.7%と、若干ではありますが上昇しています。このことは、10年間で起きた新しい流れが、家族への満足度を維持、向上させるための変化であったことを示しています。また、明らかにされた6つの潮流は、それを望んだ気持ちの変化と、結果として起きた状態の変化とに分けて考える必要があります。そうした面から、平等化と個人化の流れは、これからの家族を考えるうえで重要な視点であると思われます。

こうした点を考慮し、21世紀に向けての日本の家族を、個人がそれぞれ平等の立場で、個を尊重し、独立しながらも、ばらばらではなく、適度な距離感で結ばれている家族ということによって「**連立家族**」と命名しました。



家族の変化に影響を与えた要因



連立家族の誕生

報告書は7月1日発刊。部門・部署に配布されます。

連立家族

[日本の家族10年変化]

本編198頁・資料編400頁



本紙で紹介しました要点以外に、家族の生活に迫るデータ満載です。
ぜひ一度、手にとってご覧下さい。

主な掲載データ

世帯調査

■家族の生活
 家族の会話時間
 起床/就寝時間
 出勤/帰宅時間
 朝食、夕食のとり方
 夫婦の寝室
 持ち家の名義、住宅意識について
 外部サービス利用について

■情報
 家族でテレビをみる頻度
 家族と一緒にみる番組ジャンル
 情報別にみたもっとも詳しい人
 家族の絆を深める情報メディア

■レジャー
 家族一敷の趣味について
 この1年間の1泊以上の家族旅行
 この1年間の海外への家族旅行
 1泊以上の家族旅行の総費用
 家族で行ったレジャーについて
 毎年恒例の家族行事、イベント

■コミュニケーション
 家族内の呼び方
 夫婦げんか、親子げんか
 夫婦げんかの原因

■家族の経済
 家計費の負担状況

出費細目別の支払い方

現在お金をかけていること
 今後お金をかけたいこと
 1カ月の最低生活費
 夫が相談しないで使える金額
 妻が相談しないで使える金額
 子供が相談しないで使える金額
 モノの購入時の最終決定者
 「サイフのひも」をにぎっている人

■家族の力関係
 移合的決定権を持っている人
 家庭内のルール
 夫の転勤の際の家族同行者
 妻が大病や事故にあった時の籍り先

■親との関係
 日常の出来事における夫の親の援助
 日常の出来事における妻の親の援助
 親からの固定資産の譲渡状況
 固定資産の譲渡者
 親との経済的関係

夫調査・妻調査

■家族への意識
 家族という思い浮かべる人
 配偶者が1カ月に行う家事労働の想定金額
 自分が1カ月に行う家事労働の想定金額
 親との同居意向

子供に対する老後の被扶養意向
 老後自分を扶養してほしい人
 将来における子供夫婦との同居意向
 夫婦の役割分担意識

■家族への評価
 家族、友人関係における満足度
 自分自身の点数評価
 配偶者についての点数評価
 現実の大婚像・理想の大婚像
 自分の結婚についての感想
 離婚についての意識
 子供に期待する人物像

■家族の絆
 家族、友人との絆の深さ
 妻による夫の給与の認知状況
 夫による妻の給与の認知状況
 現在の配偶者への愛情度合
 家族をなくった(なぐられた)経験

家族の財

家族共用で持っているモノ
 夫専用で持っているモノ
 妻専用で持っているモノ
 子供専用で持っているモノ
 世帯で利用しているサービス
 世帯で今後利用したいサービス

オンラインのお知らせ

調査年報1998「連立家族」の細かなデータ検索が、HEN端末で、できるようになります。

- 夫、妻のこづかい別、子供のあるなし別での、データのクロス集計など、様々な集計が可能です。
- モデルは、スタート→Hen→オンライン→博報堂オンラインシステム(HSOS画面) 77 HILL生活総研データ検索の中に06「連立家族」;世帯調査/07「連立家族」;夫・妻調査として、作成されます。
- 8月下旬頃、検索できるようになる予定です。詳しい操作方法などは、検索のためのコードブックを配布して、お知らせいたします。